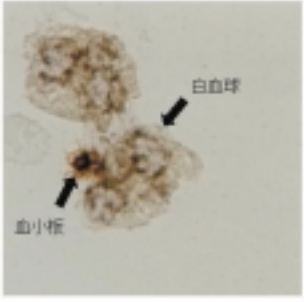
炎症性腸疾患での「白血球－血小板複合体」検査薬の開発

企　業／株式会社日本抗体研究所
研究者／日比紀文（慶應義塾大学医学部内科学教授）



▲白血球－血小板複合体

潰瘍性大腸炎やクローン病に代表される炎症性腸疾患（IBD）は、腸管に原因不明の炎症を繰り返す難病で、厚生労働省から特定疾患に指定されている。IBDの治療では強い副作用を有するステロイド系抗炎症剤などの薬剤治療や、厳しい食事制限を伴う食事療法、または患部を切除する外科的治療などが実施されている。しかし、これらの治療法は根本治療ではなく、症状を軽減する対症的な治療法であることから、患者は生涯にわたり疾患と向き合っていかねばならない。IBD治療では副作用が少なく安全性と有効性の高い治療法の確立が切望されており、さらに適切な治療法を選択するための患者病状を的確に反映する指標が重要となってきている。本モデル化においてはIBD患者の末梢血に、白血球（好中球や単球）と血小板が結合した「白血球－血小板複合体」が増加することに着目し、IBDの新たな病態・炎症マーカーとしての「白血球－血小板複合体」の有用性についての立証データ取得と、測定試薬の開発を試みた。その結果、IBD患者の末梢血には、健常者に比べて、白血球－血小板複合体が明らかに増加していることが確認され、薬剤投与の少ない患者の症状との関連性も示唆されるデータが得られた。「白血球－血小板複合体」は、動脈硬化や敗血症などの血管への障害が観察される疾患の患者末梢血でも増加していることが報告されており、他の疾患における適用も考えられる。